

心躍る至福の芸術空間が人々を待つ、アルテピアッツァ美唄

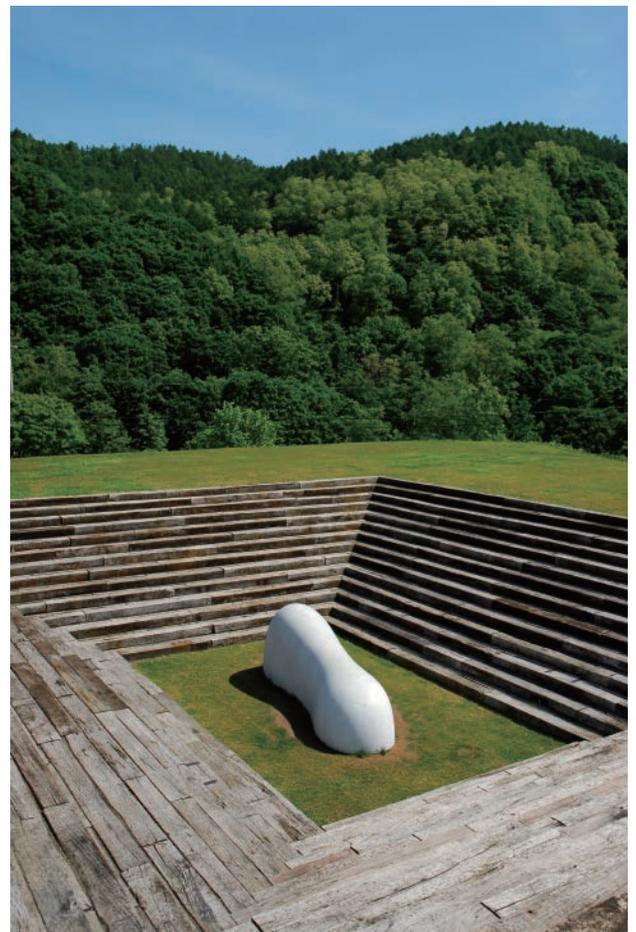
作家、ナチュラリスト マーク・ブラジル

北海道には、芸術を愛する人々に新鮮な喜びを与えてくれる場所がいくつもあるが、中でも素晴らしいのが、北海道の行政の中心で玄関口でもある札幌からわずか一時間足らずの場所にある、アルテピアッツァ美唄である。かつて炭鉱の町として栄え、その後衰退の道をたどった美唄は今、芸術を自然と組み合わせるといった類いまれな先見性で一躍有名になった。アルテピアッツァを訪れる人々は、美しい庭園に配置された安田侃（かん）の素晴らしい彫刻を通して自身の内なる宇宙と外なる宇宙を探索し、作品を眺めて感動すると同時に、直接手で触れ、感触を確かめ、風景の中で思う存分味わうことができる。まさに魂を揺さぶるこの試みは、きわめて特別な環境下で自らの感覚を探る旅へと来訪者をいざなう。

札幌からの高速を降りて東へ向かうと、道道135号線の細い道が、なだらかな山あいの森へ向かって、緑濃い川沿いに伸びていくのに出会う。石狩平野の田園風景は今やすっかり後になり、前方の川は幅を狭めながら、いずこともなく続いている。やがて右手に突然現れる控えめな標識が、アルテピアッツァ美唄に着いたことを告げる。イタリア語の標識はやや場違いな感もあるが、その前方、公園のように美しく整えられた敷地に、昔ながらのなつかしいたたずまいの、手入れの行き届いた木造校舎が見えてくる。その姿はまるで、さあ、この芝生やベンチに腰を下ろしてピクニックを楽しみなさい、若い恋人たちは気ままに散歩し、家族連れは遊んでいきなさい、そして雪が大好きな人たちよ、降り積もった粉雪を蹴散らさなさいと、促しているかのようだ。このような施設が入場無料というのは驚きだ。なぜなら、ピクニックにうってつけのこの場所は、玉ねぎの一番外皮に過ぎない。年中無休1日24時間オープンというのは、驚き以外の何ものでもない。まさに、いつ、だれにでも手が届く、感動の芸術（アルテ）だ。

園内に入り、広場（ピアッツァ）の二層目の皮をむく。というのも、この場所には宝が隠されているのだ。右手の小山を上ると、その頂きはくぼみになっていて、野外劇場が隠れていることに気

づく。中央には大きな大理石の造形がひとつ。滑らかに仕上げられた表面。繊細な丸みを帯び、まるで撫でられること、さらには愛撫されることすら求めるように、ゆるやかなカーブを描いている。これが、敷地内のそこここに巧みに配置された数多くの作品の、最初のひとつなのだ。この7万平方メートルの園地と森の小道をさまよううちにわかってくるのだが、他の作品のどれもがそうであるように、この作品にはキャプションがない。名もなき作品は、沈黙の思考を促す。この作品が設置されているくぼみから視線を上げ、樹木に覆われた目の前の丸い小山を眺めてみよう。それぞれの作品の位置や配置は、安田侃作品の素晴らしさを伝えるだけではなく、自然を超える芸術の素晴らしさを伝えていることに気づくだろう。森に向かう坂道をそぞろに上り、奇跡のように現れて消える太く短い水の流れをたどってみよう。そこに立つのは「天沐」と「天聖」。だがここを訪れる多くの子供たちにとっては、彫刻の間の水に誘われてしぶきを上げ、笑い転げて遊ぶ場所でした



ない。森や空き地へ続く小道をさらにたどると、木々の間や樹木の切れ間に配置された、いくつもの作品に突然出会う。そのうちのひとつ、針葉樹の間に横たわる巨大なブロンズ像はいつも、竜の卵のように思えてしまう。永遠の時の中で、孵化の時を待つ卵。あまたの想像が嵐のように駆け巡る。冬になるとこの場所は深い雪に埋もれ、魔法のように姿を変える。何本かの踏み跡が雪に刻まれ、主だった地点へと導いてくれる。次第に深まる雪は、着実に作品の姿を変えていく。やがて春が近づき、雪が退き始めると、作品たちは、再生の奇跡を象徴するかのようにゆっくりと姿を現す。思わず、作品たちから新芽が伸び、春の姿に生長するのではと期待がふくらむ。

野外空間でこれらの壮大な彫刻を眺めていると、もはやこの芸術家のことも、彼がこの作品を通じて表現したかったことも、どうでもよくなっている自分に気づく。思うのは、創造的な芸術と周辺環境との心地よい融合、移りゆく季節にともなって進化する自然の美。作品のいくつかは、奥尻島の浜に立ったとき、持ち帰りたふと思った、波に洗われたどっしりとした花崗岩や、石狩川源流で見た、山あいの沢水で磨かれた石に似ているのは、単なる偶然であろうが、それらの石同様、作品たちには思わず触れずにはいられないなめらかな感触があり、そこに座ったり、一休みして周囲の自然を見渡したり、さらにはもたれかかって空を見上げることすら、誘いかけている気がする。さらに印象的なのは、彫刻の持つ不変の堅固さと、季節のうつろいに合わせて姿を変える周辺環境とが織りなす、見事な調和がそこに存在していることだ。

試行錯誤から生まれる白い大理石あるいは黒いブロンズの作品は、美唄生まれの芸術家／彫刻家、安田侃のトレードマークである。生まれは地方の田舎だが、記念碑的な彼の彫刻の数々は、オーストラリア、アメリカ合衆国、スペインのカナリー諸島、イタリア、英国など世界各国で永久展示され、先ごろニューヨークのクリスティーズで行われた「Touching Time」のような作品展も、随時開催されている。日本ではもちろん北海道で多く展示され、1992年7月に公開が始まった美唄のコレクションが随一であるのは当然だが、東京、横



浜、日立、川口、酒田、白河、新潟、軽井沢、岡崎、直島、宮崎など全国各地で、極めて興味深い作品が個々に展示されている。彼の作品の名前は、数々のカタログに登場するが、同じ名前でも場所によってその形は異なる。彫刻の名前は、彫刻そのものを説明するというより、想像や回想をかき立て、彫刻のある風景や場に焦点が当たるようにつけられたようだ。したがって「意心帰」「妙夢」「相響」「間」「天光散」「天秘」「天聖・天沐」という名前は、解説の手がかりのない暗号なのだ。彫刻の形はさまざまで、あるものはがっしりとして、近代的で、幾何学的で、力強く、またあるものは、この上もなく女性的で優美な曲線を描いている。

アルテピアッツァ美唄の敷地内を気ままに歩くと出会う小道は、いくつかの彫刻へと導いてくれる。森に抱かれるもの、緑の芝生の広場に置かれたもの、学校の体育館の中であって子供たちが大喜びで登ったり、触ったりするもの。戸外の陽だまりで温められたブロンズ造形を見ると、その心地よいぬくもりにもたれかかって空を眺めたいくなる。昼間は雲の形に想像を巡らし、夜は星空の不思議に思いを馳せる。冬、大理石たちは白いボールで守られ、ブロンズたちは雪のケープや周囲の

深雪をまとって柔らかな表情を見せる。全体の景色は、クリスタルの砂漠のような不思議な様相を帯びる。それは、自然のベールをまとったアート。

元芸術文化局監督官、現バチカン美術館館長のアントニオ・パオルッチによれば、安田侃の芸術的美学の定義は、ミニマリズムとアニミズムの二語につきるといふ。確かにその通り。そしてさらに思うのは、彼の作品を（いわゆる）体で感じるためには、安田作品の哲学的、宗教的側面が大きくものを言うということだ。彼の作品は、俳句のミニマリズムを大理石やブロンズに写し取ったようだ。あたかも、神聖な神社の境内にある神岩や神木にしめ縄が巻かれているように、あるいは、アイヌ民族が木彫りのイナウで精霊の宿る聖地に印をつけたり、供え物や祈りを神に届けたりするように、安田の作品の存在が、その周囲に「孤独」と「神聖な場」を創り出しているようだ。彼の作品はなぜか、周辺の風景を取り込み、人々を誘う。だから、彼の作品やその鍵穴から見えるなつかしい景色の中を探索し、太陽で温められた彫刻の上にしぼし腰かけ、彫刻の額縁の中でポーズをとることが自然なことのように思えるのだ。

1945年に北海道の田舎で生まれた安田は、1969年に東京芸術大学大学院を修了した。1970年に奨学金を得てイタリアを訪れたのち、最も上質の大



理石の産地と言われる、トスカーナ州北部ルッカ県ピエトラサンタにスタジオ兼住居を構えた。しかし、彼の創作活動の集大成は美唄にある。美術評論家の柴橋伴夫は、アルテピアッツァ美唄を「内なる平和を見つける場」と述べ、次のように語っている。「…彫刻家安田侃が意を期して彼のライフワークの成就をなしたこの芸術広場は美唄市のみならず、あらゆる国境を超えてそのメッセージを世界に発信する（『安田侃：時に触れる』より）。日本の卓越した近代彫刻家、安田侃の作品は、ここを訪れる現代の人々に感動を与えつつ、かつて石炭に依存していたこの地の過去も示唆している。1963年と1973年の主要二鉱山の閉鎖で、かつて栄えたこの町は不景気に見舞われ衰退した。炭鉱町の人々は日本各地に流出した。だが、閉鎖の以前からこの町には、命を落とした鉱夫を思って嘆く声も響いていた。流れる血のごとく人口が流出していくにつれ、子供たちの遊ぶ声も美唄の風景から遠のき、かつての学校も扉を閉じた。栄（さかえ）小学校も取り壊される運命にあったが、昔なつかしい茶色の木造校舎と体育館は保存され、安田侃の抽象彫刻が内外に設置されることで、新たな命が吹き込まれた。

黒っぽいブロンズの彼の作品の中には、過去が



垣間見える気がする。命を落とした鉱夫や、姿を消した町の子供たちを思って嘆く声、夜の帳のようにこの地の空中を漂っていただろう炭塵のなごり。しかし、イタリア産大理石作品の白さの中には、炭鉱町の風景を美しく包む純白の雪が見える。作品を取り囲むあふれんばかりの自然を見ると、何度もここを訪れ、青い夏空や、鮮やかな秋の紅葉、春の新緑、青々とした夏の緑を背景にした作品たちを眺めたいくなる。降り積もったばかりの粉雪が、彫刻をやわらかく包むのを見たいくなる。

手で触れて感触を味わう作品も多く、子供たちは喜び、大人は時に涙する。長い時間眺めてじっくりと浸りたくなるような作品もある。アルテピアッツァの水のしつらえは、私の限られた経験から言えば独特である。華麗な西洋庭園で見られる左右対称で目を引く噴水などの、技術や熟練を誇示するようなものはここにはない。日本の寺院の庭先や、広大な回遊式庭園で見られるような、自然の池や川を模した、禅の流れを汲む完成度の高い表現もない。代わりにあるのは「誘い（いざない）」だ。白い大理石の小石を敷き詰めた浅い池は、水遊びを誘っている。一方、静かな水面に映る学校や空を見ると、時を忘れた世界に誘われる。その隣にある白い大理石に映える水路は、丘のそばの枠組みからよく見えるが、流れに沿って歩くと巧みな設計の効果で、轟音をあげ、ほとぼしるように流れる溪谷の水、やさしく含み笑いをするように流れる平野の小川、静かにつぶやく池の水など、さまざまな音の風景を味わうことができる。日本の三大回遊式庭園である兼六園、偕楽園、後樂園のように、アルテピアッツァ美唄も、あてもない散策にうってつけだ。ただ、それらの庭園の管理された回遊環境と異なり、安田侃が美唄に築いた至宝は、文字通りの自由散歩と、想像の世界の自由散歩をいざなっている。



アルテピアッツァ美唄への行き方

札幌から列車に乗ると 40 分で美唄駅に到着します。そこからアルテピアッツァまでは、バスまたはタクシーでわずか 15 分です。車の場合、道央自動車道を美唄インターで降りると、アルテピアッツァまで 5 分です。園の大半は戸外ですが、屋内施設も二つ（学校と体育館）あります。小さなショップと、お茶またはコーヒーを飲んでくつろぎながら、園内の彫刻を眺めることのできる、美しい立地のカフェもあります。屋内施設は開館時間が決まっているので、天気が悪くなりそうな場合は事前に調べておくといいいでしょう。

| 文章: マーク・ブラジル

北海道江別市在住、英国出身のライター、写真家、エコツーリズム・コンサルタント。
ウェブサイト: www.japannatureguides.com

| 翻訳: 黒澤優子